

対話的で深い学びを取入れた自己調整学習の研究

－ 多人数授業におけるレポート分析調査と書き行動方略への影響 －

藤本 光司*¹ 若杉 祥太*² 鈴木 太士*³

<概要>筆者の担当する「教育と方法の技術 [中等教育]」（以降、本授業と称す）は、多人数授業であるが対話的で深い学びを展開している。本授業で、形成的に評価した12回分のレポート成績をカテゴリ別に分析するとともに自由記述の階層的クラスタ分析を行った。その結果、自己調整学習の理論に示された「書き行動方略」の指導段階で第4段階まで到達していることが判明した。本稿では、これらの分析結果と自己調整学習との関連について述べる。

<キーワード>自己調整学習, 書き行動方略, 対話的で深い学び, 多人数授業, レポート

1. はじめに

職業作家たちは、執筆の際にさまざまな自己調整方略を実施している。その方略とは、内容構成や執筆行動、執筆環境の管理において、計画、見直し、編集、評価の過程を踏んでいる。Zimmerman(1986)は、自己調整を「学習者が、動機づけ・行動・メタ認知の3要素において自分自身の学習過程に能動的に関与していることと定義し、このようにして進められる学習が自己調整学習である^[1]」と示した。

一方、Schunk & Zimmerman(1988)は、自己調整学習の3つの段階を「遂行コントロール、自己省察、予見の3段階で構成される循環的なプロセスである。^[1]」と示している。

本稿では、学生レポートの評価基準に対するカテゴリ分析を行うとともに、自由記述の階層的クラスタ分析を行った結果および自己調整学習の書き行動方略への影響を報告する。

2. 書き行動と自己調整方略

自己調整学習における、書く活動について、Harris & Graham(1996)らは、「自己調整方略の形成法は、学習者の作文に関する高レベルの認知過程の習得を援助するように設計されている。それはすなわち、効果的な書き行動方略の自立的、内省的、自己調整の使い方を形成すること、上手な書き行動の特性についての知識を増すこと、書き行動に対する積極的な姿勢と書き手としても能力を形成すること^[2]」と示し、さらに指導の6段階の方略を示している。

- 第1段階：背景知識を形成すること
- 第2段階：書き行動方略を討論すること
- 第3段階：書き行動方略の見本を示すこと
- 第4段階：書き行動方略を記憶すること

- 第5段階：書き行動方略をサポートすること
- 第6段階：自立した遂行

3. 授業の概要

本授業は、多人数授業であるが、いわゆるアクティブラーニングの手法を取り入れた、構成主義的な授業を展開している。本授業は、臨床教育学科の2年生必修科目であり教職免許取得（中等教育）の必修科目でもある。授業の概要は、よくわかる・楽しい授業づくりをめざした教育方法やICT活用の方法の他、昨今の教育事情や教員としての資質向上の内容も盛り込んでいる。講義形式の他、グループ演習や発表、リアルタイムサポートシステム（REAS）の活用など、学生の対話的で深い学びをめざして授業を構築している。授業終了前の約20分間を使い、A4半分程度のレポートを記述させ、次時の授業までに添削・採点を行い返却している。レポートの評価方法は、評価基準（記述分量・誤字脱字・内容表現）を形成的に評価している。

4. 分析結果

レポートの分析は、4月10日～7月17日間の毎週火曜日4限、15回授業の内、12回の提出レポートを対象に行った。毎回のレポートは、記述分量：3点、誤字脱字：3点、内容表現：4点を満点とし評価した。カテゴリ別採点結果の平均値を求めるために内容表現は、4点から3点に変換して算出した。134名の受講者のうち、提出回数が1回だけであった3名の学生を除いて131名を分析対象者とした。

表1に、レポート評価のカテゴリ別採点結果を示す。平均提出回数は9.34、観点別の平均は、記述分量が2.56 (SD: 0.35)、誤字脱字が2.17 (SD: 0.44)、内容表現が1.92 (SD: 0.38)であった。

*1 FUJIMOTO Koji : 芦屋大学 e-mail = fujimoto@ashiya-u.ac.jp

*2 WAKASUGI Shota : 芦屋大学 e-mail = wakasugi@ashiya-u.ac.jp

*3 SUZUKI Futoshi : 芦屋大学大学院教育学研究科 e-mail = m2018202fs@st.ashiya-u.ac.jp

これら3つの評価基準に大きな差異が現れなかったが、内容表現に関しては、全体的に低い傾向がみられた。

表1 レポート評価のカテゴリ別採点結果 (n=131)

	平均	標準偏差	標準誤差
提出回数	9.34	2.32	0.20
記述分量	2.56	0.35	0.03
誤字脱字	2.17	0.44	0.04
内容理解	1.92	0.38	0.03

図1は、提出12回分のカテゴリ別平均点を示す。1回目から9回目までの推移と10回目以降を比較すると、10回～12回の平均値の差が減少している。これは、9回目に中間成績評価として受講者全員に、個人成績表を返却したための影響と考える。10回目以降の誤字脱字と内容表現の得点の上昇は、自己調整学習のプロセスに示された自己モニタリングによって、自己評価し、方略の計画を立て、注意を焦点化するという循環的なプロセスが成立した結果と判断する。

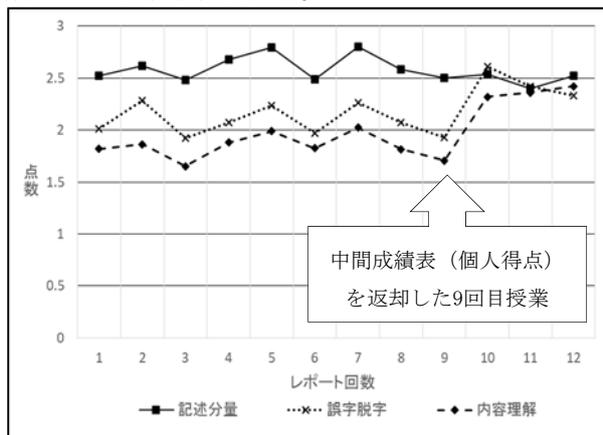


図1 提出12回のカテゴリ別平均点の推移 (n=131)

表2は、記述分量、誤字脱字、内容表現のそれぞれの組み合わせについて、スピアマンの順位相関係数検定を行い、相関行列を算出した。その結果、各カテゴリの相関係数に対して、提出回数以外の全てのカテゴリにおいて、正の相関が認められた。

表2 各カテゴリの相関行列 (n=131) ** p<0.01

	提出回数	記述分量	誤字脱字	内容理解
提出回数	1.00			
記述分量	0.14	1.00	**	**
誤字脱字	0.05	0.85	1.00	**
内容理解	0.04	0.85	0.91	1.00

図2は、12回目の授業で自由記述させた87名の文章を整理し、階層的クラスタ分析を行った。学生記述の一部を紹介すると、「授業が楽しく、

他者とのコミュニケーションがこれからの授業に役立つと感じた。」「書く事や考える事に関する力がついたように思う」、「徐々に、毎回のレポート記述にやる気が出てきて、満点の点数が取れるようにがんばった」、「自分自身の文章に自信がなかったけれど、毎回書くことで、徐々に成長できたと思う」などであった。

以上、この階層的クラスタ分析より、多くの学生の「書くこと」への気づきや意欲の向上が判明した。

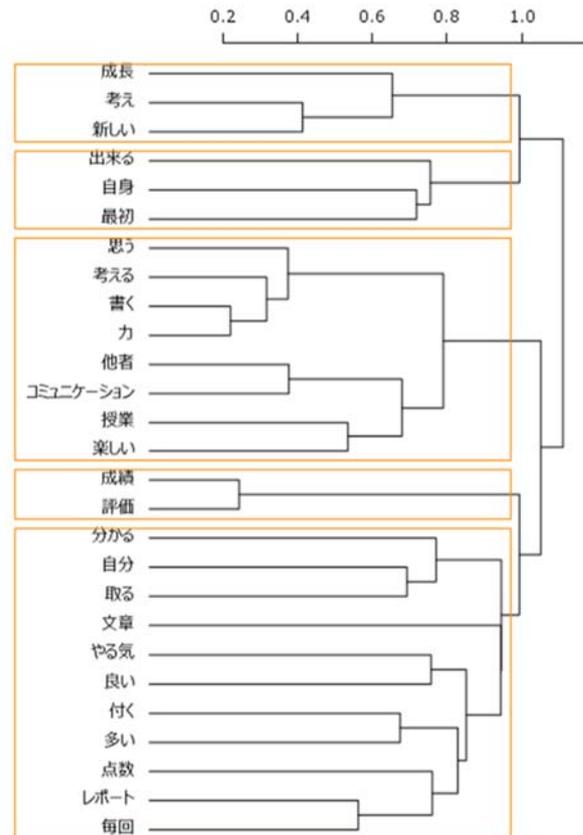


図2 階層的クラスタ分析

5. おわりに

本稿では、自己調整学習の理論を取入れた授業実践を紹介した。レポート記述の分析で「書き行動方略」へのポジティブな影響が判明した。また、先に述べた指導の6段階の方略では、第4段階までの目標達成が示唆された。

今後、さらに対話的で深い学びのための自己調整学習理論を取入れた研究を進めていく予定である。

引用・参考文献

- [1] 伊藤崇達, 『自己調整学習の成立過程』, 北大路書房, 2009, pp3-4
- [2] デイル・H・シャンク, バリー・J・ジマーマン編著, 塚野修一, 翻訳, 『自己調整学習の実践』, 北大路書房, 2007, pp21-27